

研究の目的

MDS¹⁾の後継版インターライ方式ケアアセスメント²⁾³⁾のツールを活用することで、訪問看護計画とケアプランの両者を自ら考えて学べるような教育を実践し学生の実習目標達成度から評価を試みる。

研究方法

A大学看護学科の在宅看護実習履修者に、実習の学内演習の一部として、対象者全員がインターライ方式ケアアセスメントを活用したケアプラン・訪問看護計画の実践を演習した。その後、実習の学びについて「在宅看護実習目標達成度評価表」を用いて各自の学習成果を自己評価し提出するよう課した。

結果

「利用者・家族の生活環境を説明できる」は72名(76.6%)で、努力を要するが1名(1.1%)だった。「利用者・家族の生活環境を活かした方法で援助計画を立案できる」は54名(57.4%)であり、努力を要するが2名(2.1%)であった。「利用者・家族の生活全般の解決すべき課題およびその根拠が説明できる」は61名(64.9%)であり、努力を要するが3名(3.2%)であった。「訪問看護ステーションの役割・機能について説明できる」は56名(59.6%)で、努力を要するが2名(2.1%)であった。「在宅ケアチームにおける看護職の役割・機能を説明できる」は83名(88.3%)、「各専門職種との連携・協働の必要性を説明できる」は88名(93.6%)で、努力を要するはいなかった。

全体的に自己評価はできる・概ねできるが半数以上おり、訪問看護計画とケアプラン等を自ら考えて学べるような教育ができたのではないかと推測する。

文献

- 1) 池上直己訳：日本版MDS-HC 2.0：在宅ケアアセスメントマニュアル、医学書院、2004.
- 2) 池上直己監訳：インターライ方式ケアアセスメント、医学書院、2011.
- 3) 池上直己ほか編集：インターライ方式ガイドブック、医学書院、2017.